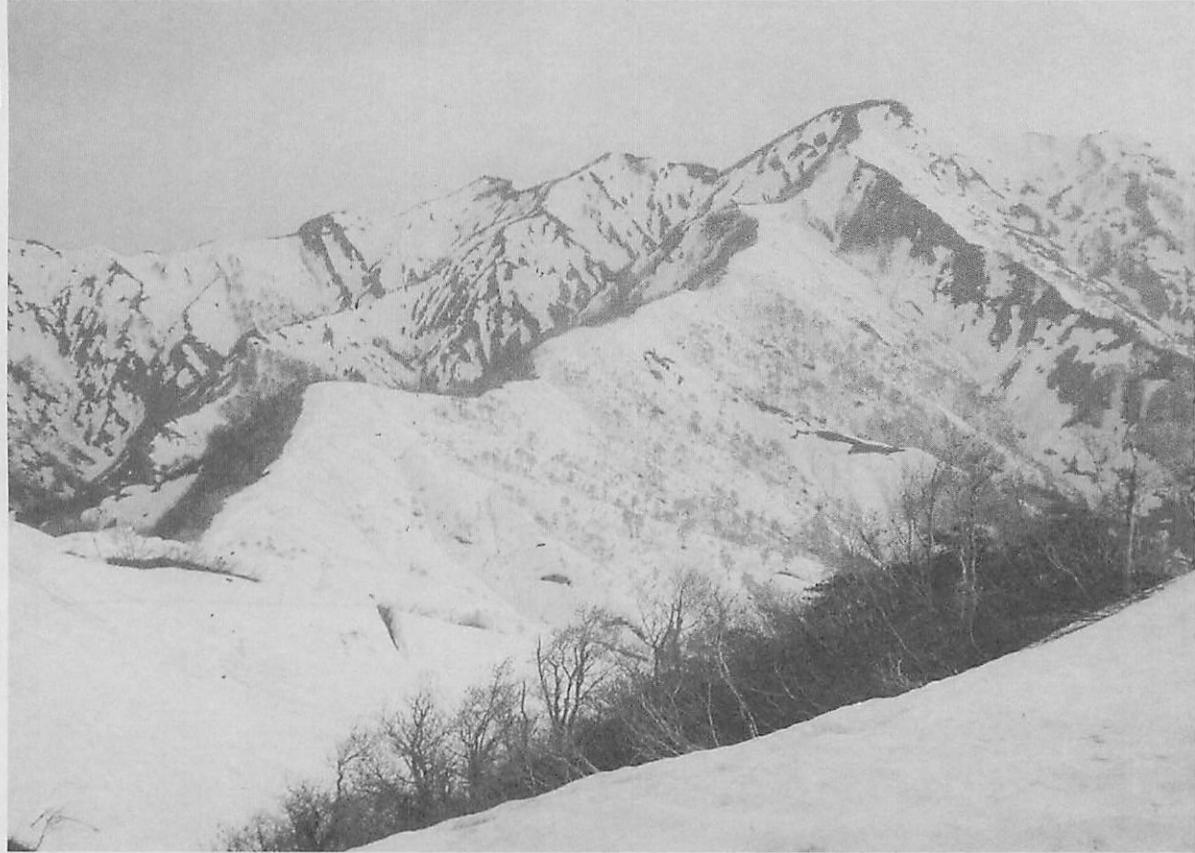


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

# R&V 62,63号

2006年7~12月



ACC-J茨城

## 北関東の山無し県

「北関東の山無し県・茨城」とは、山に恵まれない茨城県を称した当会・会報のキャッチフレーズである。

語呂といいリズム感といい、なんとも言い得て絶妙な一文に先人の才を感じさせる。言い得て絶妙。つまりわが茨城県は、同じ関東平野の北部に位置する、栃木県や群馬県と較べると一目瞭然の山梨県、いや、山無し県なのである。

そこで今宵はこんな山ヤにとっては不遇な茨城県の山について語ってみようではないか。

茨城県の山データ。茨城がいかに山無し県なのか、白山書房発刊の「日本山名総覧」(武内正・編)で先出の栃木県、群馬県と比較してみれば一目瞭然の結果となる。

茨城県・山数 116 座・最高峰：八溝山 (1022m)

栃木県・山数 278 座・最高峰：奥白根山 (2578m)

群馬県・山数 371 座・最高峰：奥白根山 (2578m)

分かつちやいるけど、とても残念な数値である。群馬百名山や栃木百名山なら聞いたことがあるけど、なぜ茨城百名山がないかって、もしそれを選出したなら、かえって選出されないほうが珍重されてしまうのだ。

そんでもって選に漏れた 16 座は「ああ、こんなちんちくりんだから選出されなかつたんだね」なんて一笑に付されてしまうコトでしょう。

ここまで差をつけられるのは、栃木県と群馬県のレベルが高いのではないかといえるかもしれない。それならと、全国的に比較してみるとこうなる。

1位・北海道・山数 1281 座・最高峰：大雪山 (2290m)

2位・新潟県・山数 943 座・最高峰：小蓮華山 (1022m)

3位・岩手県・山数 887 座・最高峰：岩手山 (2038m)

|

11位・群馬県・山数 371 座・最高峰：奥白根山 (2578m)

|

28位・栃木県・山数 278座・最高峰：奥白根山（2578m）

|

43位・茨城県・山数 116座・最高峰：八溝山（1022m）

埼玉県・山数 116座・最高峰：三宝山（2483m）

45位・沖縄県・山数 107座・最高峰：於茂登岳（526m）

46位・大阪府・山数 102座・最高峰：葛城山（959m）

47位・千葉県・山数 62座・最高峰：愛宕山（408m）

これはこれでなんとなく予想はついていた結果だけれど、イガイとキテない茨城県。

ううむ。ここはひとつ前向きに。データで勝てなきや内容で勝負なのだ。

茨城の至宝・筑波山。「いや、なにもそこまで言わなくても」という気もしますがイイんです。

茨城の山の標高を伸ばすために坂田は決めたんです。どうせなら褒めて伸ばしてやろうと。

茨城といえば筑波山、筑波山といえば日本百名山。

筑波山は日本百名山の資質に欠けるなどの意見も少なく無いですが、とんでもない。

西の富士と並び称された東の紫峰、筑波はその歴史において資質を認められているのです。

坂田はもちろん茨城出身者なら誰しも、ふるさとの原風景として筑波の双耳峰はしっかりとココロに焼きついているコトでしょう。

水郷・霞ヶ浦、桃浦から仰ぐそれは、鋭く天を突く凜々しい姿が特に印象的。春のカタクリ群生はモチロン、表登山道の奇石群は一見の価値アリです。

ふるさとにこの山在り。季節を替え何度も登ったものです。

また、一般的には独立峰といわれている筑波山ですが、北方にその山地を伸ばしてもいるのです。

岩瀬～御嶽山～雨引山～燕山～加波山～足尾山～きのこ山～筑波山。

この意外と知られていない裏筑波縦走路。雨引山から燕山、加波山と経て一本杉峠へ到る縦走路なぞ、筑波連山が、いや、故郷・茨城が世に誇れる道。こんな快適なハイキング道がスポットライトを浴びるのは実にもったいないものです。

ハナシは変わって、日本一の低山は、大阪の天保山（5m）これ結構有名なハナシ。

逆にほぼ知られていないのは、茨城で最も低い山。

まあこの際、認めてしまいましょう。”茨城”そこは北関東はもとより、全国的にも山無し県であることを！

そんでもって、ココに紹介しましょう。個性的な山々を。茨城の山は筑波だけじゃないんだぞ！と。

茨城に”富士山”は三つある。しかもこの3座、そちらの富士山とは一味違うんです。  
友部町 128m、八郷町 152m、そして笠間市 183m。そう、標高の低い富士山・日本1、2、3揃い踏みなのです。

坂田はこの日本一低い友部の富士山に登頂成功したことがあるので、残り二座、何とか登頂したいと計画しています。

またこんなものもあります。以下、坂田の山行記録。

ツバクロ（行動時間：15分）、高天原（行動時間：5分）

北アルプスの雲上の楽園、燕（ツバクロ）に高天原（タカマガハラ）では無論、ない。

茨城にも燕（ツバクロ）と高天原（タカマガハラ）があるのです。

ひとつは筑波連山の中ほど、燕山（701m）これは結構知っています。

加波山神社先のテレビ塔まで車で入れば10分足らずで登頂できます。

もうひとつは結構難関。高天原（41m）。鹿嶋市にあり、まあ山というには非常にクルシイですが、住宅街の中の公園に立派な三角点の補点があります。

しかも隣地にある集合住宅のほうが遥かに高いです。是非探してみてね。

さて、茨城で最も低い山。そろそろ解りましたか？これは皆さん、宿題としましょう。是非調べて、気分がノリノリだったら行ってみることをオススメします。

ホンのちょっと見方を変えれば、つまらなくは無いもので、過剰な期待をしなければガッカリもしません。ネタになることは間違いないです。（笑）

ところで茨城の山々、こんなイロモノばかりではありません。レッキとした楽しい山もモチロンあります。

数少ない県内登山の中でも当会会員に勧めるなら生瀬富士、鍋足山、奥久慈岩稜（男体山～籠岩）でしょうか。

ハイキングのなかにも岩稜が楽しめる、県内数少ないルートです。

そのほかハイキングがメインではありますが、いずれ心地よいハイキング道のすべてを歩いてみたいものです。

目標は大きく茨城百名山を決めるコト。選考基準は坂田の胸先三寸です。そして坂田は原稿を書きます。モチロン茨城百名山の原稿です。

そんでもって選に漏れた16座は「ああ、こんなちんちくりんだから選出されなかつたんだね」なんて結論付けられて一笑に付されてしまうのか、はたまた、かえって選出されないほうが珍重されてしまい付加価値がついて行くのか見守るのも、それはそれで楽しいのではないかと。

そして坂田は高らかに笑うのだ。「あなどるなかれ北関東の山無し県、茨城を！」と。

(坂田 記)

おもてなし山の会主 坂田 一雄（さかた かずお）  
（茨城県水戸市）

おもてなし山の会主 坂田 一雄（さかた かずお）  
（茨城県水戸市）

おもてなし山の会主 坂田 一雄（さかた かずお）  
（茨城県水戸市）

## 《目次》

2007年夏・秋号 7月～12月 ACCJ・茨城

卷頭言－北関東の山無し県－	1
集会報告	6
山行報告	7
谷川岳 一ノ倉沢中央稜	9
谷川岳 一ノ倉沢南稜	11
日原川 日陰名栗沢	13
小川山	15
仙ノ倉 西ゼン	18
吾妻連邦 中津川	20
滑川 大滝沢	24
塩見岳	25
湯俣川・弥助沢	27
城山	29
明星山 フリースピリッツ	30
奥鬼怒 赤岩沢	33
野立岩	35
南ア 農鳥岳～間ノ岳	36
救助訓練	38
岩間 愛宕山～板敷峠	39
友好山岳団体の月報・会報・その他	41
編集後記	50

\* 表紙－大鳥岳から毛猛山を望む (Photo by Sakata)

## 集会報告

(於：ガスト土浦店)

【文目】

### 【7月】

- 7月5日：本団、菊地、吉田、渡辺、坂田、笹平  
7月19日：本団、菊地、笹平、渡辺、吉田、鈴木、坂田

### 【8月】

- 8月2日：本団、鈴木、吉田、菊地、渡辺、重藤  
8月23日：本団、菊地、吉田、渡辺、坂田、笹平、鈴木

### 【9月】

- 9月6日：本団、菊地、渡辺、坂田、鈴木、重藤  
9月20日：本団、菊地、渡辺、坂田、鈴木、笹平

### 【10月】

- 10月4日：本団、菊地、坂田、笹平、渡辺、吉田、重藤、鈴木、（見学1名）  
10月18日：本団、菊地、鯉河、吉田、渡辺、重藤

### 【11月】

- 11月1日：本団、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木、笹平  
11月15日：本団、菊池、吉田、渡辺、坂田、鈴木  
11月29日：本団、菊池、笹平、鈴木、渡辺、坂田

### 【12月】

- 12月13日：本団、菊池、渡辺、坂田  
12月27日：本団、菊池、吉田、渡辺、鈴木、笹平、坂田

## 山行報告

(2007年 7月～12月)

### 【7月】

7月8日	谷川岳 一ノ倉沢中央稜	渡辺、坂田
7月22日	谷川岳 一ノ倉沢南稜	坂田、鈴木
7月23～26日	北海道 斜里岳、羅臼岳	松井
7月30日	日原川 日陰名栗沢	本団、他2名
7月31日～8月1日	魚野川 万太郎本谷	重藤、他1名
7月31日～8月2日	小川山	鈴木、他1名

### 【8月】

8月5日	仙ノ倉谷 西ゼン	坂田、松田
8月12～14日	吾妻連峰 中津川	本団、渡辺、坂田
8月15日	滑川 大滝沢	木村、菊池、鯉河、吉田
8月19～20日	塩見岳	鈴木
8月31～9月3日	湯俣川	笹平

### 【9月】

9月23～24日	城山	本団、渡辺、鈴木、重藤
----------	----	-------------

### 【10月】

10月8日	筑波山	松田
10月8～10日	明星山 フリースピリツツ	本団、渡辺、鈴木
10月14日	巻機山 米子沢	重藤、他2名
10月18日	奥鬼怒 赤岩沢	坂田

【11月】

- 11月3～5日 南アルプス農鳥岳～間ノ岳 鈴木  
11月3～5日 凤凰三山 重藤、他2名  
11月12日 救助訓練 本図、吉田、鈴木、笛平、  
11月23～28日 立山 室堂山スキー 東京4名  
重藤、他4名

【12月】

- 12月24日 岩間愛宕山～板敷峠

出発：立山  
現地：立山、室堂山  
宿泊：立山、室堂山  
天候：晴  
備品：

支分路：岩間愛宕山  
現地：立山、室堂山  
宿泊：立山、室堂山  
天候：晴  
備品：

【1月】

現地：立山、室堂山

宿泊：立山、室堂山

【2月】

現地：立山  
宿泊：立山、室堂山  
天候：晴  
備品：

支分路：立山、室堂山  
現地：立山、室堂山  
宿泊：立山、室堂山  
天候：晴  
備品：

# 谷川岳 一ノ倉沢中央稜

2007. 7.8

パーティ 渡辺聰子、坂田英希

魔の山、そう呼ばれるに至る背景に一ノ倉の断崖は言葉を必要としない。

ここには息詰まる荘厳な雰囲気がある。

軽口をつかせぬ圧力がある。

そして淡々と、刻々と時は過ぎゆく。

佇む魔に影を踏まれぬように。

朝、一ノ倉出合はクライマーが数パーティー。お互いのポジショニングに気をかけつつ、梅雨の晴れ間に喜びの声。思い起こせば一週間前に渡辺さんは「ハレる！」と断言していた。

一ノ倉の雪渓を登る季節は初めての坂田。テールリッジもすぐそこという所で、急になってくる雪渓に運動靴。もう少し硬いソールにしどきやよかつたなんなんて思ったのも束の間、いつの間にやら左手人差し指に裂傷、出血。

滴った血でズボンの左膝には真っ赤な血痕。幸い、絆創膏のぐるぐる巻きで止血できた。

「かまいたちがくるよ」この一言に実体の無い恐怖と見えない不安を隠せなかつた少年時代の微かな記憶が蘇る。

今にして思えば魔の刻みはここにあったのである。

先行は変形チムニーと中央カンテ取り付きに配備していた。

中央稜は一番乗り。気分良く準備をしていると南稜パーティーに続いて中央稜後続が一団体2パーティー。どうやら学生らしい。

1ピッチは坂田リード。暑くもなく寒くもなく、程よく乾いた岩に程よいガバ。こりやええなあ。

2ピッチ、フォロー。左に回りこんでルンゼ。ここはコールが聞こえ難い。

3ピッチ、リード。左フェースから右の凹状へ。テラスを見送り左のフェースをひと登りでビレイ。

4ピッチ、核心は渡辺さん。一段上がつての核心はスタンスが少ない。縦リストハーケンにスリング立ちこみでA0。いやA1か？あとはヌンチャクを掛け変えながら体を引き上げる。フィフィ着けてくればよかった。このピッチ、楽でない。

(後日談ですがこの3・4ピッチは正規ルートではなく迷ルートであるコトが発覚。正規には3ピッチ目のテラスで切つて、右のカンテを越えてフェースに行くのが正解とのこと。)

5ピッチ、リード。フェースは快適。しかし核心で消耗したためか体が硬い。慎重に慎重に。

6ピッチ、フォロー。陰惨な凹状は濡れていて意外と悪かった。

7～9ピッチ、ツルベで終了点。ルンゼと凹状をつなぐらしいが、リッジ沿いを行ったりきたり。それなりに快適な岩登り。この辺は浮き石が多くて神経を使つた。

雷鳴にも似た雪渓の崩落音に目を向ければ、谷を自由闊達に飛び回る岩つばめ。ゆったりと座れる終了点で大休止。今の登攀を語り合う。

下山は同ルート下降とし、要領を確認しあったら渡辺さん先行で懸垂下降。

3ピッチ下ったところで後続とバッティング。登り優先でシバラク待機。

ロープの回収には細心の注意をした。幸い順調に下降できたが、聞いていた通りロープが引っかかりやすい箇所が多い。渡辺さんが下降し回収確認すると結び目が岩溝に嵌まり込むこともしばしば。この回収確認はかなり有効なのだと思い知らされた。

中央稜取り付きで小休止したら下山にかかる。

快適な登攀に気を良くして下山はコロコロと。最後は懸垂下降でテールリッジを下りきり、雪渓の下りは軽アイゼンを装着する。

坂田が懸垂下降のロープを回収し、先行した渡辺さんを追いかけて下りはじめてホンの数分、崩落音。

コップスラブ方向上部からロック雪崩。氷塊はアツという間に雪渓を転がり落ちてくる。

「やばい」

氷塊はまるで岩場に打寄せる荒波のように四方八方に氷屑を撒き散らし、迫る。長い長い一瞬に渡辺さんの声が聞こえた。脚は咄嗟に本谷側へ向いた。

「かまいたちがくるよ」

氷が碎け散りながら目の前に迫った瞬間身を伏せた。パラパラといくつかの氷屑がザックに当たったが、幸いテールリッジ末端で方向を変えて落ちていった。そうして何事もなかったかのように谷は静寂に包まれる。

運、不運の境目なんて紙一重。左手の裂傷がすこし疼いた。

(坂田 記)

## 谷川岳 一ノ倉沢南稜

2006. 7.22

パーティ 坂田英希、鈴木大輔

もともとは2ルンゼに行く予定だった。しかし、一ノ倉沢は濃いガスに包まれている。辺りは小雨とも霧ともしれぬ湿り気に覆われて、ひどく肌寒い。衝立岩はどうにか見えるものの、その上部は真っ白な衣をまとい、容易には近づけてくれそうにない。ともかく取り付きまでは行こうということで、残雪を渡りながらテールリッジを行く。岩は冷たく濡れていって、ひどい状態だ。南稜テラスにはガイドの遠藤晴行氏がいて、やはりガスが晴れるのを待っていた。こちらもひとまず休憩し、天候が回復するのを待つことにする。遠藤氏は数名の客を連れ、中央稜へ行くそうだ。しばらく待って、なんとなく日が出てきたような感覚を覚え、じっとしているのも寒いので、とにかく行くことにした。

つるべでいったが、正直リードピッチは怖い思いをした。とにかく岩がびしょぬれなので、せっかくのクライミングシューズもまったく用を為さない。その上、足に染み込んで、足が凍えるような感じだ。草付きの部分はさらに露で豊富な水分と泥を含んでおり、通るだけでもう渡渉しているかのような濡れ方だ。馬

の背リッジはランニングビレイのとり方が悪くて、途中からロープを引っ張りあげないと来ないような感じになってしまった。この辺まで来ると、だんだん乾いているような気もしてきたが、やっぱり気のせいで、リッジも濡れている。リッジから見下ろすと、張り出した雪渓が先端から崩れ落ちはじめているのがよくわかる。最後のフェースもグレード的には大したことはないが、とにかく濡れているのだ。もうずいぶん前のことなので、ひたすら濡れていたなあという記憶しか残っていないのである。懸垂下降でルンゼ沿いを降りていく。テールリッジで先ほどの遠藤氏一行に合流した。下降はちょっと不安なので僕たちはロープを利用したが、遠藤氏は「滑ると思うから、滑るんだ。滑らないと思えば、絶対に滑らない」と豪語して、ロープを出さず客をそのまま下らせている。見ていて大丈夫かと心配になったが、案外客の足取りはしっかりしていて、問題なく下れるようだった。貸切状態ではあったが、濡れている岩をクライミングするものではないなという感じだった。それでも初級ルートとはいえ一ノ倉の歴史的ルートを登攀

できたことは価値あるものであった。これまでオールラウンドクライマーとしてのコレクションがまたひとつ増えた。

駐車場 4:30—南稜テラス 6:00—終了点  
10:30—テールリッジ 13:30—駐車場  
15:00

(鈴木 記)



烏帽子南陵を行く



南陵6ピッチ目を登る鈴木

## 日原川 日陰名栗沢

2006. 7.30

パーティ 本図一統、他 2 名

どんな経緯でこのパーティができるかが、薄ら寒い私の記憶では、自分が山に行きたいのだがパートナーが誰もいない、という話をジムでしていて、それを聞いた板谷さんの奥さんが、それなら私たちも休みなので一緒に行きませんか、という話を持ちかけてきたような。それとも、渡辺さんが「本図さん、パートナーがいないなら、私たち休みなので一緒に山にいきませんか」と板谷さんの奥さんが言っていましたよ」と仲介に入ってくれたような記憶もある。まあどうでもいいことだけど、そんなことで沢に行くことになったんだと思う。

板谷夫妻はラリグラス（山岳会）の会員で、ジムで以前から顔見知りであるが、一緒に山行するのは初めてである。行き先は手ごろな奥多摩とした。私は、奥多摩で登ってみたい沢が 50 本ほどあるが、まだ 25 本しか登っていない。つまり半分残っているのである。新人が入会したら一緒に行こうと、大切にとつといつあるのだ。そのうちの一本、日蔭名栗沢に行くことに決定する。

入渓地と下山地がかなり離れるので、車回収にモンキーを使うことにした。前

夜発で現地に向かう。ここで私はちょっとした勘違いをしてしまう。モンキーを奥多摩鍾乳洞の駐車場にデポし、小川谷林道に入ってしまったのだ。でも間違いにすぐ気づき、モンキーを回収する。どこにモンキーをデポするか迷うが、以前置かせてもらったことのある奥多摩駐在所に持っていく。おまわりさん宛に手紙を書き無断（夜中なので）でモンキーをデポする。

八丁橋付近に車を止め仮眠する。翌朝林道を歩き下降点を探すが、親切な写真付のトポにより、まったく迷わず下降点がわかった。遡行は別段悪いところもなく、沢登り基礎知識の勉強をしながら順調に進んだ。ところどころに、知識の乏しい私にでも知っている山菜があったので少し説明させてもらう。几帳面らしい板谷さんは、メモを取っていたようだったが、間違ったことは言えないなど、かえってこちらが緊張してしまった。

今回参考にしたトポでは、人気度として、5つ星から1つ星までランク分けしてある。日蔭名栗沢は4つ星になっている。通知簿で4といえば、それなりの成績ではないのか。面白いハズである。結

果、けっしてつまらない沢ではないものの、4つ星でこの程度かと疑問に感じた。おそらく奥多摩ではこんなものなのであろう。以前登った真木川赤岩沢は、最高ランクの5つ星であったが、そうとうにつまらない沢であった。となると、推して知るべしで、もう奥多摩には期待できる沢は残っていないのかも知れない。

ツメはヤブコギもなく、高丸山と日蔭名栗ノ峰の間のコルに出た。小休止し、登攀用具など遡行支度をザックにしまい、ハイキング支度に交換する。標高1700m前後の真夏の日中である。歩き始めるとさすがに暑くてまいった。鷹巣山から稻村岩尾根を下るが、こんなに急な尾根だったんだっけ、膝が痛いよ～。奥多摩駐在所に着くとおまわりさんがいた。無断でデポしたので小言の一言も言われるかな、と心配だったが、ニコニコ顔で

迎えてくれた。板谷夫妻には駐在所で待っていてもらい、モンキーで車を回収してくれる。年に1～2回の出番だけど、このモンキーは私の大切な足になってくれている。

帰り道、私はつくばに行く道をよく知らないので、板谷さんにいろいろ聞いたが、奥さんは、カーナビが付いているのになぜ使わないのだろう、と不思議に思ったそうだ。そんなんです奥様、私は使い方を知らないのです。

車(7:24)一降り口(8:04)一出合(8:14)一ワサビ田跡昼食(11:19)一尾根上のコル(13:12～13:41)一車 17:00

(本図 記)

# 小川山

2006. 7.31～8.1

パーティ 鈴木大輔 他1名

スポーレ常連の長森氏と小川山に行き、ボルダリングとルートを楽しんだ。平日、夏期休暇をとって行ったので、さすがに人はほとんどおらず、どこも貸切だ。

## 7月 31日 林の中のボルダー

有名なテストピース、エイハブ船長が設定されているくじら岩のあるエリアを行った。最初やや迷ったが、すぐに大きな岩が見えて、道がわかった。確かにくじらの先端は5m以上はあろうかというほど、巨大な岩である。外岩ボルダリングが初めてなので、どれくらいのグレードが行けるのかさっぱりわからなかつた。くじら岩の真ん中くらいにある「フィン」(6級)が楽しそうなので、やってみるも、これがよくわからない。フィンというだけあって、えらの中をジャミングしていくような感じなのだが、フットジャムからフェースのフットホールドに移したりするところがややこしく、すぐにこなせない。どうにもならないので、昼飯を食べて休憩した後、取付いてみたらあっさりできてしまった。上に抜けていくときの感じがとても気持ちよい。その後、プーシェ、トリトン、ドンキー等の岩を

触ってみたが、6級さえ満足にこなせないので、ちょっとショックだった。大体の課題でスタートをどうするのか、よくわからないのが多く、こういうのはやっぱり知っている人と来るのが一番だなと感じた。

## 8月 1日 屋根岩2峰 セレクション

小川山にはいくつものマルチピッチルートが開かれているが、その中でもグレードが手ごろでかつフリークライミングが楽しめそうなルートということでセレクションを行くことにする。まず、屋根岩2峰までのアプローチに迷いまくり、無駄にやぶこぎまでしてしまった。基部まで行くと、顕著な形をした屋根岩もどれがどれだかさっぱりわからなくなってしまうのだ。ようやく1ピッチ目のハンドクラックを見つけた。しかし、これをフォローしたもののクラックの処理がさっぱりできず、結局SLCDでA0してしまった。なんとも情けない話である。2ピッチ目はこのルートの看板とも言えるダイヤモンドスラブである。細かいホールドとスタンスを少しづつとりながら、ずりずりと体を引き上げていく。けっこ

うな長さなので、次第に足が限界に来てしまって、ミシンを踏み始めた。しかし、このピッチだけは OS しなければという思いでいっぱいになり、相当がんばつたらどうにかテラスまでたどり着けた。しかしここで時計を落としてしまう。スラブに一回当たって取付き付近に落ちていった。後で回収できたが、液晶が割れていて使い物にならなくなっていた。踏んだりけったりだ。さて、3 ピッチ目はチムニーをバックアンドトウで超えていく。これはこつがわかると優しいのだが、そこまで安定した姿勢に入れなければいけない。フォローでザックを背負っていたが、さすがに背負ったままで行けないのでハーネスに吊るした。4 ピッチ目はオフワイドスからチムニーである。このピッチは立ち木があるのでそこを使ってしまう人もいるようなのだが、一応フリーでやってみようとトライしてみるとクラックが相変わらずこなせず、どうにもならないのでリードを譲った。クラックの中に手を突っ込むと意外にかかりのいいホールドがあり、これを使うと良いとわかった。どうにかフォローして、5 ピッチ目に望む。ここは本来、トラバースするはずであるが、かなりやばい感じである。すっぱり切れ落ちたスラブだし、プロテクションは SLCD でとるしかない。まあもういいよということで、優しい頂上へのダイレクトルートを取り、屋根岩

2 峰の頂上に立った。

その後、ショートルートを触るつもりであったが、懸垂下降を終えて取付きに戻ったとたんに、どしゃ降りの雨になってしまった。まだ時間はあったので、どうしようという話になったときに近くの岩根山荘にクライミングジムができたというので行ってみた。倉庫を改造していく普通のジムと変わらない。ひたすら夕方までボルダリングをしてこの日は終わった。

#### 8月2日 ガマスラブ・スラブ状岩壁

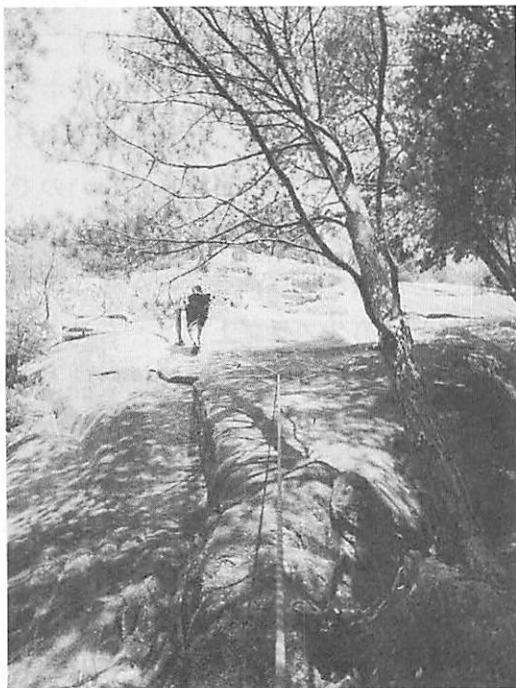
小川山といえばスラブである。ということでガマスラブへ行き、触ってみるとした。とりあえず「ブレイブハート」(10a)をやってみるもこれができる。いい感じなのだが、手が持たなかつたり、足が抜けたり、どうしても完登できない。しつこくやっているうちに、一本指ポケットのリップで指先を切り、大出血する。つめが割れたかと思うくらいのひどい傷みでもう登れなくなってしまった。スラブ状岩壁で数本長森氏のレイをして、昼で帰ることにした。今回はどういうわけか、いまいち成果をあげられず、しかも指に怪我をするというおまけつきで、がっくり肩を落として帰路に着くこととなつた。

今、振り返ってみると、この夏から秋ごろまで大したルートも登っておらず、

まったくといっていいほど成果がない時期であった（梅雨の時期はすっかりさぼっていたし）。年明けた冬から一気に急上升していくのだが、この時期のスランプとは関係あるのだろうか。地道にインドアでボルダリングをしながらテクニックを学んでいたのが、下地になっているとは思うが、もうちょっとこの時期を大切に出来れば、上達するのにも時間はかかるなかつたと今では思える。よくフリー

を始めて何年という聞かれ方をするが、人によってフリーに取り組む密度は異なるので、あまり意味はない気がする。要は一回一回の外岩、一本一本のルートをどれだけ大切にできるかで成長度合が変わるように思う。12台を目の前にした今までえ、学ぶべきことはたくさんある。だから、フリーは面白い。

(鈴木 記)



陽のあたるスラブで

## 西ゼン

2006. 8.5

パーティー 坂田英希 松田 尚

2006年8月5日 谷川の国境稜線に連なる平標山の谷、仙ノ倉谷 西ゼンに、坂田さんと行って来ました。前夜発で、土樽駅付近より仙ノ倉沢ぞいの林道を車でたどってのアプローチ。小屋跡を過ぎたあたり泊。フルフラットになる坂田さんのWISHの威力で朝までよく眠れました。

5日は朝からよく晴れ、緑が濃い平側の山や尾根がくっきりと見えました。絶好の沢日和。

しばらく林道をたどり、毛渡沢出合付近で仙ノ倉沢を吊り橋で渡って平標新道という入山&下山に使う登山道を行くのですが、この登山道は、2007年8月時点では、入り口の吊り橋が落ち、通行止め状態で一般の登山客があまり通らないようで多少荒れ気味でした。

平標沢分岐より入渓。

下部は積雪期の名残の、泥にまみれた雪のせい？で枯れ芝が多く、水流も多少濁り気味でした。（台風1～2本待つてからのはうが、クリーニングされきれいになっていると思います。秋のルートなのかな？）西ゼンは、第一

スラブ付近に雪渓が少し残っており、めがね橋のようなスノーブリッジをやむをえずくぐって抜ける、というスリリングな一面もありました。

第1スラブ、第2スラブは、評判のとおり素晴らしいスケールのナメ・スラブで特に第2スラブを見上げたときの感動というか絶望感はすごいものでした。スラブはスタンスやホールドは豊富でしたが、傾斜気味のスラブベースでスリップが許されないので、ザイルをけっこう張りましたが、なかなか緊張させられるものがあります。

第2スラブ上部は、右のほうから岩だなを拾うように高度を稼ぎ、最後は草付きをたどって滝の上に抜けました。

第2スラブを抜けてからは、平標北面の一面の笹藪を見晴らしながら源流部の熊笹の草原をひたすら辿り、池とうの点在する稜線に抜けました。

平標山へは、丘のようななだらかな稜線を辿れば行けますが、日帰り山行ということもあり、ここで引き返し、西ゼンを見下ろす尾根についた平標新道を辿り、下山しました。

「スケールといい、野性味といい、やはり上越の沢は、東京近郊の小ぶりの沢とはグレード以上の厳しさがあるね～」と坂田さんとお互に充実感を分かち合えた山行でした。

帰路、林道を、外人さんを数人連れたガイドが入山してきており、「これがもしかしたらキャニオニングのツアーかも。」と思われました。確かに、残

雪の泥が消えたら美しい水の流れる谷になっているので水遊びも楽しいかもしれません。

P/S スラブは、初心者は連れてゆきたくない気の抜けない（スリップが許されない）傾斜があります。いい沢ですが、その点注意が必要です。

(松田 記)



第二スラブ



西ゼンに望む松田

# 吾妻連峰 中津川

2006. 8.12~14

本図一統、渡辺聰子、坂田英希

## 夏の情景

照りつける太陽、見上げる蒼空に入道雲がくっきりと立体的でまるで手に届きそうなほど鮮明に見える。

しかしとてつもなく天高く舞上がるそれにただ呆然とするばかり。

視線を落とせば、焼けたアスファルトに逃げ水を見る。たまらず木陰で一休み。暑苦しい蝉時雨とどこからか聞こえるラジオの高校野球中継。

「ホンモノの夏がきた」子供ながらにそう思ったものである。

中津川は吾妻連峰を東西に分けるがごとく最深部に分け入る大渓谷である。

下流部に白滑八丁、黒滑八丁の両雄。上流にはこの谷の屋台骨となる大滝の数々が流れ落ち、天上の草原で大団圓を迎える、まさにゴールデンルート。36度目の夏はそうして始まるのである。

## 黒滑八丁

中津川レストハウスから河原へはホンの5分ほど。折角だからとシバラク下流へ下り黒滑八丁を遡行する。

沢登りにおいて、ほとんどは割愛される

黒滑ではあるが中々どうして流れに洗われた奇石は一見の価値がある。

## 白滑八丁

中津川下流部の白眉、白滑八丁は明るく滑らかなU字峡谷が八丁ほども続く。ときにヒタヒタと、ときに流れに没しても笑いが止まらない。などと呑気をしていると急激に黒雲が青空を被いはじめる。雨だ。誰もがそれを予感していた。白滑最後の釜は本図さん先行の上、ロープで引っ張り上げてもらう。この夏、最初の泳ぎとなる。

## 幕場

雨足が次第に強くなり、一旦右岸台地に避難する。

シバラクは何をするでもなく呆けていたが、段々寒くなってきたので最悪の事態を考えて幕場の整地を始める。

ヤブの刈り込み、整地、薪集め。皆お互いに作業が白熱しスッカリ完成された幕場の準備が出来上がり、あとは薪に火を灯せばと言うところで天候は回復。折角作り上げた上等な幕場を放棄するという、これはこれで最悪の事態となつた。

### 魚止め滝

轟音とともに落ちるチョックストーン滝は他のどの記録、どの写真より明らかに水量が多かった。

左右の流れは押し合い、圧し合いそしてトルネードしながら釜へと注ぐ。

スッカリ威圧されてしまったのは坂田ばかりではあるまい。左岸から巻き、大きな瀧をひと泳ぎしたら取水口に出た。

### 銚子口

低く滑らかすぎる落ち口に大きな釜を持つ銚子口。見え隠れするその奥の険谷も相まってかその静かな落ち口に一種の不気味さを感じる。

呆けた笑みをたたえる無機な瞳の奥に見る不気味さとでも言うべきか。

今日はここで終了とし、いくらか下流の砂地で幕とした。

夜は夜で豪勢な焚火に獵祭の吟醸。夜が夜なら何時にも況して杯は進み、酩酊するがよし。

### 観音滝

明けて空模様は高曇り。

昨夜から気がかりだった天気予報と空模様の葛藤に渡辺リーダーの決断が下る。観音滝は左岸を巻くとヤブに埋もれた登山道がある。適当に下れそうなところから沢床に戻れば特に問題はない。

### 神楽滝

鉛直に落つる由緒正しき 40m の直瀑、神楽滝はここから始まる巨大な滝壺の幕開けを彩るに相応しい。

シバラク戻った左岸を巻くことになるのだが、巻き道にツエルトと靴が放棄されてある。なんとも考えさせられることであるが、あまり悲劇的な結末ではなかつたことを望みつつ思考を巡らす事になる。川床に戻ると夫婦滝。水流左を行く。さらに静滝。水流左の貴重な登攀。

渡辺リーダーはフリーで行く。坂田も続くと見せかけて途中でロープを投げてもらう。

### 熊落滝

判然としない高巻きは優に 2 時間を超えた。

途中で坂田は腹が減って腹が減って仕方がなくなったのだが、何とか我慢できたのはヤブの急登でお腹一杯になってしまったからかもしれない。

そんな時役立つののは普段トレーニングしているクライミングジムでのムーブである。

ヤブホールドにアウトサイドステップ、カウンターバランスで灌木ホールドをとり、巨木の根にヒールフック体をジンワリと上げたらプッシュし最後はマントリング。って、ホンマカイナ。

白滑八丁を中津川の白眉とするならば熊落滝は最深部であろう。

屈曲し下から見ることのできない真の姿は難攻不落の要塞であろう。高度は50mもあるらうか。これを落ち口から観ずして中津川の何を語ると言うのか。

叶うことなら下から見上げてみたい。おそらくは絶壁に囲まれたその風景に言い知れぬ絶望感を抱くに違いない。

### 朱滝

たとえるならば朱滝は中津川の象徴であろう。

落差は最大の60m。とはいへ女性的な繊細さを感じさせるのがこの滝の魅力でもある。

少し手前で見つけた砂地で本日は幕とする。天気も憂慮されたがここまでくれば遡行も何とかなりそうである。

今日は今日で豪勢な焚火に今宵も獺祭。語るも良し、黙るも良し。

闇の底から見上げれば無造作に切り裂かれた星空の世界が広がる。

聞こえるせせらぎ、大渓谷の涼しきことよ。

### 最終日

明けて旅の最終日。薄明の雲がオレンジ色に染まる。谷にまだ陽は届かない。

朱滝の巻き道は何とか判別ができる。時

折微かに残るペンキ跡などを見つつ、40分ほどで滝上に出る。

それでもまだ腰まで浸かる釜を渡つたり、微妙なバランスでへつたりしていくと右岸に見えるヤケノママ。

そこはかとなく硫黄臭が漂う。それから何てことない河原が続くが、穏やかな流れに柔らかな陽光は決して簡単な偶然ではない。すこぶる気分は良好だ。

ところどころに草原を見る頃になると流れは蛇行し始めヤブに埋もれていく。

いい加減嫌になった頃、流れを放棄し草原をつないでいけば大凹に突き当たる。

さわやかな風に乗って、涼しげな人々が草原の木道を軽快に散策する。まるで別世界に紛れ込んでしまったかのようだ、

薄汚れた服装で潰れたアンパンなどを頬張っていると幾分卑屈な気分になるものだが、遡行終了の充実感でそれも何だか可笑しくて一様に笑みが絶えなかった。

仕上げに渡辺さんと坂田は西吾妻を踏んで百名山ゲット。すまいる、すまいる。

36度目の夏を制覇した気分であった。

幾度すごしたこの季節。不思議と夏の印象は濃いようで淡い。

想い出は錯綜し断片的になっていくとしても、やはり見えるのはあの頃とちっとも変わらない夏空なのである。

8月12日 レストハウス(7:29)—入渓点(8:02)—黒滑八丁まで下ってから橋の下へ戻る(8:41)—ビバーク地(13:33)

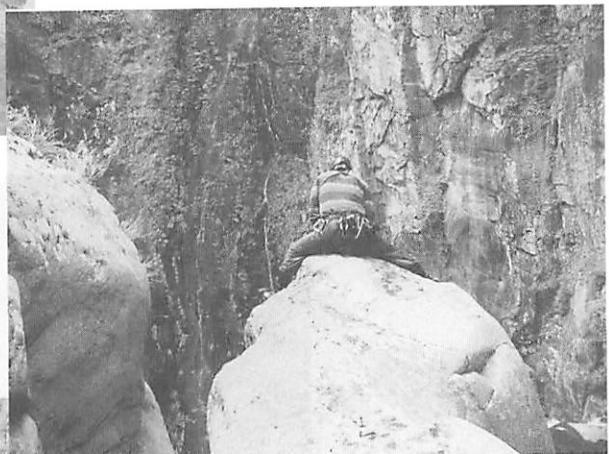
8月13日 ビバーク地(6:59)—銚子口(7:12)—神楽滝(10:00)—熊落滝下(12:12)—熊落滝上(14:30)—朱滝(16:27)

8月14日 ビバーク地発(6:20)—朱滝上(7:06)—登山道(11:26)—西大巔(13:41)—ゴンドラ(15:08)

(坂田 記、コースタイム 本図)



白滑八丁を行く



熊落の滝をのぞき込む



こんな感じ

## 吾妻連峰 前川 大滝沢

2006. 8.15

パーティ 菊地光夫、木村 一、吉田 仁、鯉河仁志

菊地氏より、ナメ滝の続く沢があるからいくべーの誘いの電話で、今回の山行となった。前夜、谷田部に集合し、高速を利用し大滝沢の入渓地点の滑川温泉に12時頃着く。いつもの宴会は、久しぶりのメンバーに話が弾んだ。15日朝、7時出発。入渓地点は滑川温泉近くの橋からだ。入渓すると舗装道路のようなナメと釜が続き楽しい沢歩きだ。1時間くらい歩いた時に突然120mの大滝が現

れる。実にみごとな滝だ。大滝は右岸のブッシュの中を登り滝上に出る。大滝から上流も明るいナメ滝が続き、やがて古いつり橋が現れた。その先で右岸の枝沢をすこし登ると温泉に下る登山道に出た。そこでリーダーが用意してくれたそうめんを食べる。沢で食うそうめんは、実にうまい。その後滑川温泉を目指し下山した。

(鯉河 記)



滑床での吉田、菊地、鯉河

## 塩見岳

2006. 8.19～20

パーティ 鈴木大輔

金曜の夜つくばを出発し、長時間の運転の末、鳥倉につくころにはもうずいぶん遅い時間になっていた。駐車場はすでに車でいっぱいだ。どうにか隙間を見つけてもぐりこむ。次の朝は素晴らしいまでの快晴だ。今日は峠までなので、朝ゆっくり行くことにする。よく踏まれた登山道を歩いていくと、三時間あまりで小屋に着いた。テント客も何パーティかいるようだ。時間がたつにつれ、すこしづつガスが来て、あまり眺望がきかなくなってきた。時間が有り余っているので、すぐ近くの烏帽子岳まで往復してみるとする。塩見岳を正面に見ることの出来る展望台だ。蝙蝠岳へ続く稜線のあたりで、次々移り変わる雲の形をしばらく眺めていた。テント場に戻った後、ビールを飲んで適当に時間を過ごし、明日に備えて寝ることとした。

翌日、帰宅もあるので、夜明け前よりかなり早く出発する。空には星々がまたたき、登山道に生える草は朝露をたっぷりとたたえている。荷物が少ないので、駆けるように進み、あっという間に本谷山に着いた。うっすらと東の空が明るくなりつつあるが、まだまだ夜は終わりそ

うにない。さらに進んでいくと、次第にあたりが明るく照らされ、ヘッデンもないほどになって来た。薄い雲海の向こうに稜線が浮かび、紅い光を帯びて目覚め始めている。朝日がはっきりと感じられるようになったころ、塩見小屋に着いた。ちょうど起き出す人が多い時間だ。塩見岳への最後の道を確実に歩んでいく。塩見岳の頂上に立つと、富士山が薄雲につつまれて、白いシルエットを見せていた。周囲の山がすべて見渡すことのできる、明るく気持ちの良い朝だ。この時間であれば、蝙蝠岳まで往復できるなと思ったが、計画書から外れて行動するとあまりよろしくはないので、引き返すこととした。暑いくらいの良い天気で、緑が映える季節を楽しみながら、下っていった。お昼には駐車場にたどり着き、帰宅の途へ着いた。

しかし、土日のピストンはちょっと味気ない。なかなか最近、長い縦走もできない。いろいろ手を出しているせいもあるが。たまにこうして、テントを担いで単独行というのはいわば心の洗濯というやつで、突然行きたくなるような時がある。ついでに、3千メートル峰はとりあ

えず登っておこうと昔決めたことを少しづつ片付けているのだが、なんだか行きにくいのが余ってしまった。どうしたものかなと思っている次第である。

8/19 鳥倉駐車場 8:30—三伏峠 11:30  
8/20 三伏峠 3:30—本谷山 5:20—塩見岳 6:20—本谷山 8:30—三伏峠 9:30—鳥倉駐車場 12:00

この日は、朝から天候が悪く、雲間の塩見岳が見えない。午後になると、雲間の塩見岳が見えて、その姿がとても美しい。しかし、その後、天候が悪くなり、雲間の塩見岳が見えなくなってしまった。そのため、この写真は、雲間の塩見岳が見える瞬間のものである。



(鈴木 記)

雲間の塩見岳

この日は、朝から天候が悪く、雲間の塩見岳が見えない。午後になると、雲間の塩見岳が見えて、その姿がとても美しい。しかし、その後、天候が悪くなり、雲間の塩見岳が見えなくなってしまった。そのため、この写真は、雲間の塩見岳が見える瞬間のものである。

この日は、朝から天候が悪く、雲間の塩見岳が見えない。午後になると、雲間の塩見岳が見えて、その姿がとても美しい。しかし、その後、天候が悪くなり、雲間の塩見岳が見えなくなってしまった。そのため、この写真は、雲間の塩見岳が見える瞬間のものである。

この日は、朝から天候が悪く、雲間の塩見岳が見えない。午後になると、雲間の塩見岳が見えて、その姿がとても美しい。しかし、その後、天候が悪くなり、雲間の塩見岳が見えなくなってしまった。そのため、この写真は、雲間の塩見岳が見える瞬間のものである。

## 湯俣川・弥助沢

2006. 8.31～9.3

パーティ 笹平孝

半年ほど前に知人から欲しかった折り畳み自転車を貰った。今回のルートは長いアプローチを楽にするため、自転車を買ったらまずここに行こうと前から計画していた所だ。

31日 早朝、折り畳み自転車を組み立て七倉温泉を出発。長いトンネルを簡単に通り過ぎ、すごく嬉しくなる。高瀬ダムの上り坂は疲れるので歩いていく。高瀬ダムからは平坦な道なので、林道終点まで楽に行けた。ここから先の道もしばらく進み、名無避難小屋手前で自転車をデポする。

晴嵐荘を過ぎて吊橋を渡り湯俣川に降り立つ。川沿いには手掘りの温泉がいくつかあり、目の前には広いテント場もあるので快適そうだ。ここで沢装備の準備をして湯俣川に入渓する。広い河原はすぐに狭くなり岩壁が迫ってくる。水量もあるので緊張する渡渉があり、思っていたよりも大変だった。しばらくすると難所も終わり、河原歩きになる。遠くには、まだ残雪が少し残っている源流の稜線が見えた。途中、伊藤新道の吊橋跡があり、ワイヤーだけが残っている。沢沿いの伊

藤新道はすでに無くなっているみたいだ。ワリモ沢を過ぎると崩壊地帯に変わり、ガレで赤茶けた山の斜面が続き危なっかしい。硫黄沢は見事な乳白色の川が流れている。二股を樅沢に入り巨岩帯を越え弥助沢に入る。大雨の影響なのか、弥助沢は岩がゴロゴロしていて良いテント場がなかなか見つからない。幾つかある枝沢を適当に入った所で砂地のテント場を見つけた。テントを張り、さっそく焚き火と魚釣りをする。

1日 停滞。周辺の散策と稜線に上がる沢を偵察して、のんびり過ごす。

2日 この辺りの地形は分かりにくい。間違ってないか不安だが、沢を詰めて稜線をめざす。途中、ガレた滝があるが特に問題なく越えられた。源頭のカールは一面にお花畠が広がっていて、トリカブト、クルマユリの花がたくさん咲いていた。沢筋が右寄りだったので、ルート補正で左側にある沢筋までお花畠を漕ぐ。やがて登山者の声が聞こえ始め、登山道と伊藤新道の分岐点に出た。すぐ近くにある三俣山荘には寄らずに鷲羽岳へ向かう。

鷲羽岳頂上は黒部源流の山々が見渡せ、すばらしい景色だ。時間に余裕があるのでしばらくの間、ここで景色を楽しむ。そして、水晶小屋でビールを買って東沢乗越でテントを張った。水を汲みに東沢を降りて行くが湧き水の気配は無く、ガレた沢は遙か下まで続いていた。こんな事なら岩苔乗越でビバークした方が良かったと後悔する。本格的に降りて行くと、沢沿いに真っ黒い塊りが二つ見える。牛かな？あっくマだ。2頭のクマまで50メートルは離れているので安全だが、ここで引き返す訳にはいかない。拾った木の枝を岩に叩いて追っ払う。テン場から標高差250メートル降りてやっと水場に辿り着いた。水を6リットル汲み終え一息こうとしたら、さっきの2頭のクマが下流20メートル位の所に居座っている。この近さだと追っ払うには危険な距離なので、すぐに登り返す。往復で1時間30分の水汲みになった。

3日 登山者の話し声で目が覚めた。真砂岳分岐から竹村新道を降りる。南真砂岳付近にあったブルーベリー畠でブルーベリーをバクバク食べまくった。湯俣岳頂上は木で覆われていて展望なし。ここから樹林帯の長くて急な下りがはじまる。途中で湯俣岳へ向かう2人組と会う。晴嵐

荘が近くになると、崖のような急斜面に登山道があつて驚いた。まずは晴嵐荘の内風呂に入りサッパリと体を洗う。小屋の人に話を聞くと、川沿いの露天風呂がある場所は、近年の大雨で川の地形が変わってしまったようだ。入山の時にデポしておいたビール4本を回収して、川沿いの露天風呂に入る。どの露天風呂もちょっと浅く、しかも川底から熱湯が湧き出している。地面に石が敷いてあっても、かき混ぜていないと熱い。湯加減が難しくて、川の水を少しだけ入って来るようしているが、水面はぬるくお尻が熱いのでゆっくり入っていられない温泉だ。やっぱり内風呂にはかなわない。夕方、湯俣温泉を出発して薄暗くなったころ自転車を回収する。林道終点から30分で駐車場に着いた。

8月31日 七倉温泉(4:40)-湯俣温泉(7:00)-弥助沢(13:20)

9月1日 停滞

9月2日 弥助沢(7:00)-稜線(9:30)-東沢乗越(14:50)

9月3日 東沢乗越(7:30)-湯俣温泉(13:30~16:30)-七倉温泉(19:10)

(笹平 記)

## 城山

2006. 9.23～24

パーティ 本図一統、渡辺聰子、鈴木大輔、重藤有史

せっかくの連休、天気もよさそうだしアルパインに行きたかったのだが、来月の明星を見据えて城山のマルチに行くことになった。

・トポと岩場を照らし合わせ、まずはホームボーイとグラシアスを登る。ジムの5.8とは違ってガバホールドとガバスタンスなどないが全員登り切る。

・マルチの練習ということで西南カンテへ移動。ピンの少なさ、ルートのわかりにくさ、等々よりアルパインに近いルートだった。このルートにも5.8や5.9があるのだが、さつきのよりずっと易しく感じた。

・気をよくしてバトルランナーへと挑む、取付きがよくわからなく、適当に登りだす。核心の2ピッチ目（5.10a）はちょっとしたループを乗っ越すのだが、先行している鈴木、重藤ペアが抜けるのを途中で待っていたら思いの外力を使ってしまった&ループの出口のガバを見落とした（↑いいわけ、（＾＾；）であえなくテンション、くう。

・ジプシーマリー（10a）を登るつもりが間違ってブラッディーマリー（11c）を登ってしまったらしく全然登れない。力尽きて本日終了。

岩場を降りて温泉＆宴会へ

2日目 鈴木さんがつま先を痛めてしまったので、鈴木、重藤ペアはシングルを登ることにし、我々はエクスカーション（10a, 10a, 10c, 10a, 10a, 5.9）へチャレンジ。出だしからしょっぱい。基本的にホールド、スタンス小さいのでつま先や指先が痛くなってくる。でも、不思議なものでそれしかないちゃんと使えるもので、1ピッチ、2ピッチ順調に登れたが、核心ピッチで痛恨のA0。んだって怖かったんだもん。そのワンポイント以外はわりといい感じで抜けられた。

この日はエクスカーションだけでお腹いっぱいになつたので早々に終了。フリースピリッツへの手応えを胸に岩場を後にした。

（渡辺 記）

## 明星山 フリースピリッツ

2006. 10.8~10

パーティ 本団一統、渡辺聰子、鈴木大輔、

雨にもまげず、風にもまげず・・・高速道路の通行止めにも、あんまりよくない天気予報にもまげずに糸魚川へと向かったのはなんとしても今回フリースピリッツを登りたい！という気持ちがあったから。夜中3時近くに糸魚川インターに到着し、近くのコンビニの駐車場に車を停めて眠りに着いた。朝、眼をさましてとりあえず岩場へと向かう。以前明星に来たのはクラブに入会して1年ちょっとだったときだったろうか、大岩壁の迫力に負け、ものすごいふるえが来たのを覚えている。何年かぶりに見る岩場はやはりすごい迫力だったが、前回のような恐れを感じなかつたのは、ほんのちょっとだけ自信がついたからなのかそれとも単に団太くなっただけなのか・・・。今日はどうせ登れないから、と街へ買いだしにでかけ早々に宴会に突入する。雨は降つたり止んだりを繰り返し、明日の登攀も危うい、と不安を覚えながら眠りについた。

10月9日

朝からよい天気。でも岩はびしょぬれで川は大増水。石灰岩は乾くのが早いし、水も午後になれば引くかも、と期待しつ

つ右手に双眼鏡、左手にトポを握りしめ対岸からルートについて議論する。そういうしているうちに岩もだいぶ乾いてきたし、抜けるのは無理だとしても何ピッチかは登れるだろうと準備をして出発する。が、しかし川の増水は全く引かず、渡れる可能性ゼロ。だれもいないほとんど乾いた岩の取付きを目の前にしてしばし途方にくれる。結論として今日は無理だね、ということになりすごすごと引き返した。鈴木さんは1泊2日だったので結局取付きとルートの確認だけで帰ることになってしまった。なんだかとても氣の毒だった。

その後も議論は続き、結局暗くなるまで一でもないこ一でもないとやっていた。明日こそ登るぞ、と早々に就寝。

10月10日

3時起床、周囲が明るくなるのを待って出発した。さすが晴れの特異日だけあって絶好の登攀日和のようである。河原まで降りてみると、川の増水は前日と変わりなく、ものすごい渦流だった。ここまでできて引き返すわけにはいかん、と唯一の弱点について川にダイブしなんとか対

岸に渡る。10月の朝5時に全身びしょぬれ、寒いことこの上ない。岩を見上げると日なたは遙か上、早くあそこまでいきたいと登攀準備をする。前日の打ち合わせでは奇数ピッチは渡辺、偶数ピッチは本団さんということだったのだが、突然本団さんが「俺が先に登るから」と登りだした。河原は風が強く、濡れた体にツライ。がくがくふるえながらビレイをする。

1ピッチ ぶるぶるがくがく、寒いことこの上ない。

2ピッチ ちょっとした垂壁を乗っ越しその後トラバース（ほとんど歩き）。下見の成果がでている感じ。

3ピッチ 登攀記録を読むとランナウトするので勇気が要るらしいが、本団さんぐいぐい登っていく。

4ピッチ 少し登って下りトラバース、ルートの中で唯一乾いてないピッチ。岩の隙間に手を入れると濡れていて非常に滑る。濡れた石灰岩がこんなに滑るとは思わなかった。しかも、その次は足を濡れたところにスマアしなくてはならず、非常に緊張した。今回のルートの中で一番怖かったところだったかもしれない。なんとか抜けて右斜上。そこそこ快適なのだが、緊張しているせいか寒いせいか動きがなんだかぎこちなかつた。

5ピッチ 下部の核心といわれるピッチ。支点が遠かつた。

6ピッチ 梅干し岩を左から乗っ越す。こ

の部分、岩は脆いしちょっとパワーが要った。その後もう一回下りトラバース。『ホールドにぶら下がる』と『スタンスがない』と記録にあるが、しっかりしたスタンスがあり問題なく越える。ここまで来てようやく体も温まり、気持ちも落ち着いてきた。

7ピッチ、8ピッチ 特に問題なく越える。9ピッチ 8ピッチ目でバンドを横断した後渡辺が登り過ぎてしまったようでバンドをちょっと下降（余分な1ピッチ）。ここで小休止をする。少し前の寒さはどこへやら、日差しは暑いくらいだし、岩場全部貸し切りだしすごく快適！

10ピッチ 右斜上。出だしはよかったですのだが、登るにつれルートが判然としなくなる。支点もほとんどないので、登られていそうな所を登るとシューリングがあつたのでピッチを切った。（後でわかったことだが、オリジナルルートはもう少し手前でピッチを切っているようだが、今は我々が行ったラインを登るパーティーが多いらしい）。

11ピッチ ACCJルートまできたとの指摘があり、鷹ノ巣ハングの下まで。

12ピッチ カンテを登って回り込み、左に行くとパノラマトラバースの入り口に着いた。先に行くとロープの流れが悪くなるので、一旦切る。

13ピッチ 名所パノラマトラバース。『怖い』との評判だが、スタンスもホールド

も豊富で特に問題なし。高度感と眺めは素晴らしい。

14ピッチ 上部ルートの核心部、A0だけはするまいと緊張して登りだす。支点は豊富でカチカチ。凹角を直上してから右のカンテに移って乗っ越したら実質的な登攀終了。と同時に支点も終了。めいっぱいロープを伸ばして灌木でビレイ。

15ピッチ 左上して見覚えのある南壁の頭まできて終了。

一休みした後、お互い膝に気を使いつつゆっくり降り、最後はショートカットのため送水管を渡って対岸へと戻ってきた。

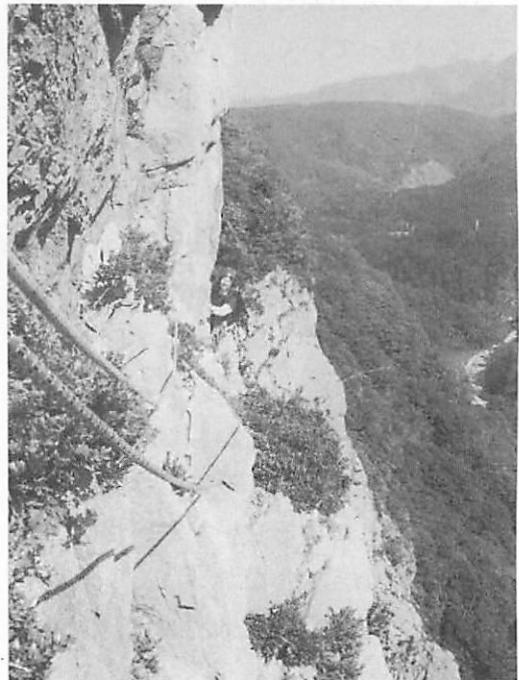
取付きに残置してきた本団さんの沢靴を取りにもどるべく、藪トラバースをして朝ダイブしたポイントまで行ってみたが、水の勢いはおさまっておらず、回収は諦めて車へと戻った。

最高の天気の中、誰にも邪魔されることなく快適なクライミングができた一日だった。

(渡辺 記)



寒いです！



パノラマトラバース。超楽しいです！

# 奥鬼怒 赤岩沢

2006. 10.18

パーティ 坂田英希

行かねばならない場所がある。越えねばならない峰がある。ときに漕ぎ分け、泳ぎ、そして攀じる。

モチロン、ときには迷い、流され、次の一手が出ないことだって珍しくない。

今までいくつの山を越えてきたものだろう。

一体、何を掴めたものか。そして何を失ってきたのだろう。そんな、時の流れに錦秋ぶらり一人沢旅。

思い立ったが吉日。今日はそんな物語なのです。

目指すは以前から気になっていたものの、奥鬼怒という近そうな気軽さから「いつでもいけるじゃん」と、機会を逸していた夫婦淵温泉以奥の黒沼田代。

赤岩沢の二つの大滝とナメの美しい魚沢下降となんともゼイタクな沢旅になるはずなのですが。

8：15 夫婦淵温泉駐車場

「しまった寝過ごした！」初っ端から三時間ほど寝坊。タイムを確認したら何とかイケそうなので歩きながら朝食を摂ることにした。

林道を一時間ほど。大きな堰堤先から入渓。錦秋の、とはいかないが紅黄緑の斑はそれはそれで鮮やかなものでココロ洗われる。

右岸から合う最初の流れが赤岩沢。シバラクは何てことない流れ。

一時間ほどで赤岩沢・下の大滝。

水流右を直登。上部は立ってくるので要注意。落口近くは傾斜も緩み、左へ。

さらに一時間ほどで上の大滝。

滝は二段になっており記録ではロープを出して2ピッチ。上部ピッチが核心らしい。

下から核心が望めず、フリーの直登は躊躇われたので巻くことにした。

巻きは手前左岸の流れに入る。左に枝沢を一本見送ったら、その先左の支尾根を行く。

先ほど見送った左の枝沢にも20mほどの滝がかかっているため、これも一緒に巻くことになる。

そのため支尾根を登り20m滝の上部で一旦流れに出たらもうひと尾根越えなければならない。

ここから30分ほどで流れは極めて単調となり、傾斜が落ちる。心なしか右岸を開けてきて明るい雰囲気となる。

右岸台地に上がると少々行過ぎたようで、いくらか戻ると黒沼田代を発見した。

湿原はすでに冬支度。彩を失った草々が微かな秋風に揺れていた。

湿原から南進すれば魚沢に行き着く。

数本の窪み（涸沢）を見送るがこのあたりはおそらく大抵魚沢に流れ込むのである。

適当に当たりをつけた涸沢も例外に漏れず、シバラクで流れが出始め20mほどのナメ滝で本流と出合う。灌木と笹を頼りに下降。

三俣に出た。寝坊の影響で極力、ロープを出さないようにと考えていたが、ここは懸垂下降とした。

その後からはナメ床が続き、気分もいい。いくつか出てくる滝はクライムダウンで通過するも10mほどの滝で今一度懸垂下降。

その後、これまたナメ床が続き、気分がいい。

一転、連瀑帯を巻き下り、ゴルジュ状を四肢を突っ張り越えていく場面も。

それでも尚ナメ床が続き、またまた気分がいい。

しかし、下部になると妙に滑るようになる。沢靴でも歯が立たない。

最後に美麗なナメ滝、スダレ状を過ぎれば黒沢出合まで30分ほど。

16:00、林道に上がれば30分で夫婦淵温泉。どうにかヘッデンの世話にならず済みそうだ。

人に悩みはつきもの。いかに恵まれていたとしてもそれは尽きることがない。

迷い流される中、どんなヤマでも自分の道は必ずある。悩むのも自分なら、答えを持っているのもまた自分。

ひととき、気分を変えれば、案外それはそんなに複雑なものではないはずなのです。

(坂田 記)

## 野立の岩場

2006. 10.29

パーティ 吉田 仁、渡辺聰子、他1名

2年ぶり？くらいに野立に来た。当時はあまりメジャーなところではなくローカル主体のエリアって感じだったが、久しぶりに訪れるとおおにぎわいで印象がかわっていた。これも雑誌で特集されたり、あるクライマーが高難度の課題を開拓した影響だろう。しなびた場所好きの私にしたらちょっと残念な感じがした。地元の人たちもなれたのか何も言ってこない

し。あのころは上の道路から危ないからやめなさいとか、風邪引くから洋服着なさいとか言われたけど。。。まあ、体に絵を書いた裸のヤローどもが河原で吠えながら岩をパンパンたたいて喜んでるんだからいい迷惑だったろーなー。今回は、増水して限られたとこしか登れなかつたけどなんかとても懐かしかったです。

(吉田 記)

## 南ア 農鳥岳～間ノ岳

2006. 11.3～5

パーティ 鈴木大輔

11月3日

2日の夜、つくばを出て奈良田に向かう。当初、ナビを設定したら、もはや通行できない広河原経由の道を行くようになっていた。経由地を設定することで思い通りのルートになったが、行く直前、設定する時に経由地設定を忘れていたので、間違えて広河原へ向かってしまった。52号線に出るところで気がつき、あわてて南へと進路を変える。車も少なく、首都高の渋滞もなかったので、5時間ほどで奈良田の駐車場に着いた。翌朝、工事のダンプの往来が激しく、通行する騒音で目が覚めた。今日は祝日だが、工事は行われているらしい。駐車場から工事用の林道を歩く途中も、ダンプが速度も緩めずに脇を通り過ぎていくので、怖い思いをする。脇によけられるときは無理に歩かず避けることにした。大規模な砂防工事をしているところから、林道は終わり、山道に変わった。工事現場を横断する吊橋を渡り、巨大な重機が騒音を立てている現場を迂回しながら、沢の上部へと抜けていく。紅葉はまだらではあるものの、鮮やかに色づいていて、深まる秋を実感させてくれた。樹林帯に入ると、

降り積もった一面の落ち葉が地面を覆い隠している。わずかに残る踏み跡と、テープやペンキのしるしを頼りに進んでいった。河原を離れ、小尾根を巻く道に入ると、急登が出てきたりして、細かいアップダウンが多い。河原に降り立ち、滑りやすい木製の橋を何度も渡って、まだかまだかと思っていたら、急に小屋の前に出た。行く途中はまったく人に会わなかつたが、小屋には2人組みのパーティが昼食をとっていた。ちょうどお昼になっていたので荷物を降ろし、チキンラーメンを食べた。そうしているうちにもう一人単独行の人が上がって来、テントを張っていた。その後、写真屋らしい二人組みも来た。今日はこれで全部のようだ。小屋は避難小屋として、一室空けてあったが、テントのほうが気楽なので、見晴らしのいい場所に張ることとした。正面に富士山が見える。明日は晴れるだろう。夕飯はあまりものの赤飯にカレーだ。それほど悪くはない。夕方、日が暮れると同時に寝たが、冬用シュラフではまだ暑く感じる。気温は低かったが、平地の冬くらいと思えば、寒いという感じはしなかつた。

## 11月4日

朝、夜明け前に大門沢を出る。日の登る方向に富士山が見える。快晴だ。大門沢からの道はうわさどおりの急登で、息が切れる。ここまで道はずっと雪がなかったのだが、稜線に近い日陰の部分には残雪が見られた。しかし、アイゼンをはくまでもないほどの薄い雪だ。空は晴れわたり、眼下には雲海が広がっている。富士山はまるで孤島のように、雲海の中、静かに佇んでいる。稜線上の下降点には2時間程度で着いた。荷が軽いので、速いペースで行けた。その後は、快適な空の上の縦走路を農鳥岳に向かって歩いていく。この山域には自分ひとりしかいないのではないかと思うような静けさだ。

南アルプスの山々にすっぽりと包まれているかのようだ。農鳥岳を越えると、単独行の人を一人見つけた。けっこう大きなザックを背負っている。ピストンせず縦走するのだろう。農鳥小屋で追いついた。聞くと、北岳から仙丈まで行くらしい。昔、逆ルートではあるが、そんな計画を立てて、天候悪化により途中で断念した覚えがある。途方もなく長い道のりだ。挨拶をして、先を行く。北面の下り道はかなり残雪が多い。それでもやわらかいので、大したことはない。足元に注意しながら下っては登りを繰り返す。調子はよく間ノ岳には10時過ぎには着いた。昼食をとる。さすがに3千メート

ルの稜線は止まっていると寒い。間ノ岳からは南アルプスの主峰のほとんどを望むことが出来る。一息ついて来た道を引き返す。途中山小屋関係の人に会い、天候が夕方に崩れると言っていた。そんな感じはしなかったが、時間は予定通りなのでそれほど心配はない。同じくらいのペースで同じ道を戻る。大門沢下降点まで来ると、だんだんガスってきて、視界が悪くなってきた。広河内岳まで足をのばそうとも思っていたが、それはやめて、さっさと下ることにした。テントに着いたのは午後2時くらいだ。この日のうちに下山できる時間ではあったが、急いでもしょうがないのでごろごろしながら、優雅な時間を過ごした。

## 11月5日

2日前に通った道を降りる。途中で上着を一枚拾ってしまった。まだ新品のようだ。このまま放置しても雪に埋もれるだけなので、持つて行くことにした。先行している人がいれば聞いてみようと思っていたが、誰にも会わなかつた。登山口には紅葉狩りに来ている人がいたが、まばらな紅葉なので、残念がっていた。奈良田の駐車場についた後、温泉に入り、帰宅した。

11/3

奈良田駐車場 9:00—大門沢小屋 13:00

11/4

大門沢小屋 6:00—大門沢下降点 8:00—  
農鳥岳 8:40—農鳥小屋 9:30—間ノ岳  
10:30—農鳥岳 12:30—大門沢下降点  
13:00—大門沢小屋 14:30

11/5

大門沢小屋 7:00—奈良田駐車場 9:30—  
自宅 15:00

(鈴木 記)

## 救助訓練

2006. 11.12

パーティ 本図一統、笹平 孝、吉田 仁、鈴木大輔、ACCJ-東京4名

日立のお岩山にて救助訓練をしました。今回は参加者が少なかったです。今までには参加者も多く二日間開催してたりしたのですが今回は日帰りで駐車場から少し上がったところでおこないました。水戸葵からの参加者も少なかったのですが、内容はいつもどおり濃く、人数が少なかったのが功を奏してかなりのヘビーロー

テーションになり、かなり身になる訓練になったと思います。繰り返しの反復の課題もあるが、なぜかいざやってみると忘れてしまっていることも多く、やはり繰り返しの練習がものをいう、といつも感じる次第であります。次の訓練もみなさんふるって御参加下さい。

(吉田 記)

## 岩間愛宕山～板敷峠

2006. 12.24

パーティ 本図一統

今の私に課せられた問題といえば、とにかく歩く力を持つことだろう。元通りとはいかなくとも、皆さんに大きな迷惑をかけないで歩けるくらいになりたい。そういう一心で今までトレーニングをしてきた。今回の山行もそのトレーニングの一環である。それと初めて使うハンディナビの使用訓練も兼ねている。

早朝まだ薄暗いうちに家を出る。最初の予定では、愛宕神社の表参道である階段を登るつもりでいたが、ナビの指す位置がずれていて場所が分からぬ。なんか変だぞと思うも、まあ私の使い方が悪いのだろうと、しかたないので参り坂から自動車道を歩いて登ることにする。途中から登山道が右に分かれていたのでそれに行く。早朝登山だろうか、上から2名が下りてくる。だれもいない愛宕神社で、一日も早い足の完治を祈って、ご縁がありますようにと5円をお賽銭箱に入れる。

裏参道の階段を下りると駐車場に出た。早朝だというのに車が何台か止まっている。人間はいるようだが、何をしているのか少々気になった。すぐに山道に入る

がとてもよく整備されていて、軽トラックなら走れるんじやないかと思うくらい広い道である。周りの木々が大きくて、あまり展望が得られないが、途中展望台が作られていて、上まで登ってみると非常に景色がよかつた。先ほどから私と前後して一人のハイカーが同じ方向に歩いている。半分ビックをひきながらの私と違って歩くのが速いのか、いつの間にか見えなくなってしまった。

団子石峠を過ぎ屏風岩まで来る。この近くにいくつかのボルダーがあるのだが、まだ時間も早いのでだれも登っている様子はなかった。今回の最高点である難台山の頂上に着いた。自分ひとりだけのピークだ。滑りやすい道を気をつけながら道祖神峠に向かう。この道祖神峠は普通「どうそじんとうげ」と読むであろうが、地図には「どうろくしんとうげ」とカナがふってある。ここではこの読み方が正しいのだろう。道祖神峠には狩猟らしい団体が犬を引き連れて10名くらいいたむろしていた。この人数ではおそらく猪狩であろう。間違って撃たれないうちに早足で通りすぎる。

すぐに洗心館の「狭き門」をくぐる。

「ほろびに至る門は大きくその道は広い。狭き門から入れ。その道は細く険しくとも、そこに真理が開かれる」という看板が左側に立っていた。う～む、良き文なり。洗心館の庭を通り吾国山を目指す。ところで前述したが、持っているナビの指す位置は、実際の現在地とは明らかにズれている。帰宅してからわかったことだが、持っていた地図は日本測位系、ナビは世界測位系だったのである。これで同じ失敗はしなくて済む。練習をあと2～3回やれば実際の山で使い物になりそうである。

吾国山では6～7人の中高年パーティほか数人が休憩しており、にぎやかな雰囲気であった。近くにはハンググライダーが飛んでいる。今日は気流が良くないのかあまり高く上がっていない。昔は私

もここでよく飛んだものだ。フィックスロープのある急坂を転げ落ちるように下ると林道にてた。あとは林道を延々と歩くだけだ。途中ハンググライダーの発進基地を通るが、顔ぶれがほとんど変わってしまい、知らない人ばかりであった。いや、1～2人は知っているひとがいたが、「あれ、もとずさ～ん、最近なんで飛ばないんですか～」と聞かれるのが目に見えていたし、いちいち答えるのが面倒だから、テイクオフをちょっと見ただけで、顔を合わせないようにして、そそくさとまた歩き始める。いいかげん足が痛くなるころ板敷峠に着いた。約7時間の歩行であった。コースタイムは記録紙を紛失しましたのでわかりません。

(本図 記)

## 《友好山岳団体の月報・会報・その他》

ありがとうございました

—— 月報 ——

◎ろうまん山房通信 N0.32 2006.8.9 B5 12P Rohman Sanbow

南会津・浅草岳、飯豊・大石ダム～エブリ差岳～大日岳～飯豊山～川入、谷川・白毛門沢、鈴鹿・神崎川ツメカリ谷、川内・五十母川日倉沢ほか

◎ろうまん山房通信 N0.33 2006.10.11 B5 10P Rohman Sanbow

南会津・叶津川～赤崩、白神・中ノ又沢～赤石川～泊沢～林道ほか

◎ろうまん山房通信 N0.34 2006.12 B5 P16 Rohman Sanbow

妙高・燕温泉～妙高山、那須三本槍岳、秋のOB山行・山形葉山、只見川左岸・笠倉山・  
塩沢川～立安沢～笠倉山、大菩薩・滝子山ほか

◎ろうまん山房通信 N0.36 2007.4.5 B5 P20 Rohman Sanbow

栗駒山・山スキー、那須・三本槍岳、奥多摩・御前山、川内・日本平山、会越・見神  
楽岳、屋久島・尾之間～宮之浦岳～白谷～雲水峡谷ほか

◎まほろば N0.31 2006.9 B5 42P まほろば山岳会

埼玉岳連遭難対策訓練・天覧山、信越・魚野川～野反湖、白山、和賀山塊・マンダノ  
沢、奥利根・楳俣川矢種沢、大石沢右俣右沢ほか

◎まほろば N0.32 2006.10 B5 10P まほろば山岳会

葛根田川北ノ又沢～八瀬森～大深沢～大深山荘～松川温泉、八幡平・仮戸沢～東ノ又  
沢～八瀬山荘～仮戸沢、上州武尊・武尊沢ほか

◎まほろば N0.33 2006.11 B5 10P まほろば山岳会

黒部ルート見学会、二子山中央稜、神流川金山沢、二口・大行沢桶の沢ほか

◎まほろば N0.34 2006.12 B5 16P まほろば山岳会

岩トレ・女ヶ岩、山人祭ほか

◎まほろば N0.35 2007.1 B5 8P まほろば山岳会

上越・吾策新道、伊豆天城・猿山&登尾ほか

◎まほろば N0.36 2007.2 B5 8P まほろば山岳会

尾瀬戸倉スキー、会津駒ヶ岳、中里スキー場～柄沢山、翼沢山～窓明山ほか

◎まほろば N0.37 2007.3 B5 6P まほろば山岳会

上越・蓬沢～シシゴヤの頭、南会津・中山峠～七ヶ岳ほか

- ◎まほろば NO.38 2007.4 B5 4P まほろば山岳会  
上州武尊・宝台樹スキー場～武尊山ほか
- ◎まほろば NO.39 2007.5 B5 18P まほろば山岳会  
越後・守門岳、浅草岳、奥利根・十字峠～丹後山～利根本流～大水上山～十字峠、十字峠～日向山～中ノ岳、奥多摩・一之瀬～笠取山～唐松尾山～一之瀬ほか
- ◎まほろば NO.40 2007.6 B5 8P まほろば山岳会  
只見山菜山行・蒲生川、小白沢、大白沢、越後・下権現堂山～上権現堂山ほか
- ◎わらじ NO.607 2006.10 B5 6P わらじの仲間  
奥秩父・滝川豆焼沢ほか
- ◎わらじ NO.608 2006.11 B5 16P わらじの仲間  
越後・小穂口ノ頭、奥秩父・火打石谷、虎毛・三滝沢～赤湯又沢温泉、高松山尾根～小戸沢日東ノ沢ほか
- ◎わらじ NO.609 2006.12 B5 8P わらじの仲間  
栗駒山・産女川ほか
- ◎わらじ NO.610 2007.1 B5 16P わらじの仲間  
奥日光・湯元～日光白根山、ハッ・真教寺尾根～赤岳～県界尾根、妙義・星穴新道ほか
- ◎わらじ NO.611 2007.2 B5 14P わらじの仲間  
南阿冬単独縦走、飯豊・裏川烏帽子～檜山烏帽子、朝日・桧原～石見堂岳～志津トンネル、南会津・白沢～会津朝日岳、葛根田川鶴ノ湯温泉～曲崎山～中ノ又沢、葉山・仙元山ほか
- ◎わらじ NO.612 2007.3 B5 10P わらじの仲間  
七ヶ岳、湯西川温泉～高瀬山～白倉山～中三依ほか
- ◎わらじ NO.613 2007.4 B5 10P わらじの仲間  
五十湖周辺・明神ヶ岳、釧迦ヶ岳、玉原スキー、那須・三本槍ヶ岳スキー、谷川・井戸小屋沢左岸尾根ほか
- ◎わらじ NO.614 2007.5 B5 10P わらじの仲間  
鉄山西尾根スキーほか
- ◎わらじ NO.615 2007.6 B5 20P わらじの仲間  
奥多摩レスキュートレ、守門岳単独、火打山、北ア・白馬主稜～親不知、信越・白砂山～苗場山、南会津・黒谷川、恵羅窪山～丸山岳ほか

◎わらじ N0. 616 2007. 7 B5 16P わらじの仲間

春の集中・帝釈・黒岩山・4パーティで行う、北ア・笠ヶ岳南西尾根ヒノキ尾～直登尾根～笠ヶ岳、黒部ダム～ハシゴ谷乗越～黒部別山、奥鬼怒・黒沢～赤岩沢～魚沢ほか

◎さわぐるみ N0. 40 2006. 9 A4 32P グループ沢胡桃

浮川事故報告、朝日・三面川岩井又沢中俣沢、八久和川中俣沢、御坂・濁沢、足尾・小田倉沢～津室沢、谷川・西黒沢、奥秩父・滝川水晶谷～入川～大荒川谷～笛吹川東沢～東のナメ沢、谷川・湯檜曽川ほか

◎さわぐるみ N0. 41 2006. 10 A4 16P グループ沢胡桃

藏王・馬見ヶ先川八方沢、谷川・東黒沢～ウツボギ沢、万太郎谷、中ア・中田切川荒川沢、南会津・桧枝岐川下ノ沢、丹沢・中川川箱根屋沢、越後・三国川黒又沢五竜沢ほか

◎さわぐるみ N0. 42 2006. 11 A4 16P グループ沢胡桃

朝日・荒川キリン沢～石滝川～岩井沢、奥利根・小穂口沢、櫛俣川前深沢、森吉・ノロ川桃洞沢～赤水沢、谷川・檜又谷大スラブ、魚野川北カドナミ沢ほか

◎さわぐるみ N0. 43 2006. 12 2007. 1 A4 20P グループ沢胡桃

会越・叶津川～芳沢、谷川・足拍子川、奥多摩・一ノ瀬川水干沢、妙義・入山川裏谷急沢、R C T・東吾野、古賀志山、越沢、日和田、幕岩、奥秩父・茅ヶ岳、丹沢・檜洞丸、雪上訓練・ハッジョウゴ沢、硫黄岳ほか

◎さわぐるみ N0. 44 2007. 2. 3 A4 16P グループ沢胡桃

八ッ・渋ノ湯～天狗岳～根石岳～硫黄岳、安達太良・二本松塩沢スキーリー場～勢至平、奥秩父・廻目平～金峰山～増富鉱泉、南会津・志津倉山、二股山、雪山レスキュー訓練・土樽、奥武蔵・浦山川冠岩沢、八幡平後生掛山スキー、上信越・黒斑山ほか

◎さわぐるみ N0. 45 2007. 4. 5 A4 24P グループ沢胡桃

蓼科山、会越・入叶津～沼ノ平、八ッ・編笠山～権現岳～天女山、奥多摩・鶴川大群沢、日原川小川谷滝上谷大栗窪、確保訓練・冠岩沢、尾瀬山スキー、レスキュー訓練・奥秩父、那須・男鹿芦ノ沢～大塩沢～塩原、丹沢・玄倉川同角沢、朝日・大越～鍋森～離森、北ア・霞沢岳ほか

◎さわぐるみ N0. 46 2007. 6 A4 30P グループ沢胡桃

丹沢・玄倉川同角沢、春合宿・台高・蓮川絵小屋沢～野江股谷～ヌタハラ谷、蓮川奥の平谷～中奥川赤倉谷～半左衛門谷、御坂・芦川横沢、奥秩父・豆焼沢、足尾・浮川

三俣沢大岩沢、両神・中津川金山沢ほか

◎さわぐるみ N0. 47 2007. 7 A4 14P グループ沢胡桃  
朝日・大越～小沢源頭～鍋森～離森、奥秩父・入川金山沢大荒川谷、安達太良・高森  
川仏沢、徒渉訓練・魚野川、那須・大蛇尾川西俣～東俣ほか

◎Next ! N0. 129 2006. 9 B5 32P 山岳溪流釣り集団むげん  
黒部・東沢谷、奥只見・恋ノ岐川～池ノ岳ほか

◎Next ! N0. 130 2006. 10 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん  
奥秩父・丹波川、岩手・胆沢川小出川ほか

◎Next ! N0. 131 2006. 11 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん  
谷川岳ほか

◎Next ! N0. 132 2006. 12 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん  
焼石岳ほか

◎Next ! N0. 133 2007. 1 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん  
叶津川、丹沢ほか

◎Next ! N0. 134 2007. 2 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん  
広沢寺岩トレほか

◎Next ! N0. 135 2007. 3 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん  
奥多摩・つづら岩ほか

◎Next ! N0. 136 2007. 4 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん  
仲間の近況報告ほか

◎Next ! N0. 137 2007. 5 B5 22P 山岳溪流釣り集団むげん  
奥秩父・滝川水晶谷、つづら岩ほか

◎Next ! N0. 138 2007. 6 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん  
百村山ほか

◎とまのかぜ N0. 166 2006. 9 B5 68P 童人トマの風  
会越・室谷川倉谷沢～西ノ沢、西ノ沢～名無沢～大川、南ア・栗代川、奥多摩・逆川、  
ニセコ・パンケメ肯ナイ川、北ア・黒薙川北又谷、川内・杉川青里沢～早出川、朝  
日・泥又川東俣横山沢～猿田川ジッパ沢、舟形川西俣沢～岩魚沢～東大鳥川にしノ俣  
沢、三面川泥又川～猿田川赤イ沢、谷川・小出俣川マチホド沢、毛猛・黒又川赤柴沢、  
岩手・葛根田川松沢、下田・鎌倉沢～砥沢川、神室・薄久内川大沢、谷川・魚野川茂  
倉谷、越後・シッカイ倉沢～岩魚止沢、飯豊・滝川赤石沢やごう沢、奥秩父・入川～

## 大荒川谷ほか

◎とまのかぜ N0. 167 2006. 10 B5 55P 童人トマの風

越後荒沢岳集中・7パーティで沢から集中、中ノ岐川滝沢～花降沢、焼石・尿前川天竺沢～本沢、日光・外山沢川緑沢、焼石・南本内川大滝沢、胆沢川小岩沢、栗駒・産女川、唐沢幕岩追悼山行、白神・赤石川、飯豊・内ノ倉川七滝沢、北海道・ユウトムラウシ川ほか

◎とまのかぜ N0. 168 2006. 11 B5 48P 童人トマの風

羽前葉山集中・6パーティで沢から集中、奥利根・八木沢川東メグリ沢～西メグリ沢、越後・水無川滝ノ沢左俣、白神・追良瀬川～ウズラ石沢、二口・穴戸沢高倉沢～エシコ沢、糸滝沢、日光・鳴虫山ヤキバ沢、南紀・大塔川黒蔵谷、越後・米子沢ナメ沢、皆沢川、三国川黒又沢五竜沢ほか

◎とまのかぜ N0. 169 2006. 12 B5 35P 童人トマの風

南ア・遠山川～池口沢、谷川・衝立中央稜、幽の沢字右ルート、越後・破間川～八十里越、三浦半島・森戸川南沢、妙義・入山川、房総・待崎川、芋川ジロト沢左俣、会越・叶津川木の根沢～八十里越ほか

◎とまのかぜ N0. 170 2007. 1 B5 24P 童人トマの風

ハツ・赤岳主稜、小同心クラック、権現岳～赤岳、ホノルルマラソン、蓼科・春日ルンゼ、雪訓・八海山、天神平、谷川岳、ハツ広河原アイスほか

◎とまのかぜ N0. 171 2007. 2 B5 34P 童人トマの風

越後・大割～大兜～三石～巻機山、北ア・横尾尾根、八幡平・茶臼岳スキー、八甲田・前嶺、ハツ・ジョウゴ沢アイス、西上州・御場山西ルンゼアイス、足拍子。クロガネの頭中尾根～東尾根、北信・佐渡山五地蔵山スキー、谷川総合訓練ほか

◎とまのかぜ N0. 172 2007. 3 B5 32P 童人トマの風

ニセコ・山スキー、越後・金城山、飛騨・輝山～猫岳～金山岩山スキー、戸隠・P1尾根、会越・御神楽岳ムサ沢右岸尾根、西上州・犬殺しの滝、ナメネコフォールアイス、頸城・放山～笛倉温泉、北ア・小遠見山～平川、裏ヒヨルート、戸隠・乙妻山～佐渡山スキー、ハツ・中山尾根ほか

◎とまのかぜ N0. 173 2007. 4 B5 26P 童人トマの風

越後・八海山・外コダツ沢左稜、中ア・経ヶ岳、乗鞍・平湯～猫岳・四ツ岳、3月のフリークライミング、上州武尊山北尾根、谷川・東谷山、越後・粟ヶ岳、谷川・万太郎谷戸沢左岸尾根、足拍子南尾根、平標山ヤカイ沢、出羽三山・湯殿山スキーほか

◎とまのかぜ NO.174 2007.5 B5 34P 童人トマの風

4月集中・未丈ヶ岳・10パーティで行う。ハッ・赤岳東稜～真教寺尾根、戸隠・戸隠山～一不動、北ア・乗鞍山、上越・神楽峰スキー、丹沢・雷木沢～水晶沢ほか

◎とまのかぜ NO.175 2007.6 B5 70P 童人トマの風

会越・浅草岳、頸城・笛倉温泉～焼山、尾瀬・平ヶ岳スキー、鳥海山・鳥越川スキー、鉢立～文殊岳スキー、北ア・白馬沢右股スキー、鹿島槍東尾根、毛勝三山スキー、芋川・滝沢中俣～大兜山、紀州・大峰奥駈け、北ア・剣岳ハッ峰三稜、月山、湯殿山山スキー、白山北方稜線、飯豊・飯豊本山スキー、岡山・備中フリー、南紀・西ノ谷、須金・江合川鎌倉沢～保呂内沢、北ア・蓮華岳～大沢右俣、尾瀬・御池～燧岳ほか

◎すずらん通信 NO.306 2006.9 B5 20P 鈴蘭山の会

和賀・生保内川、堀内沢～マンダノ沢～羽後朝日岳、丹波川・黒川谷、奥秩父・鶏冠谷左俣、台高・大台ヶ原大杉谷～堂倉沢、奥秩父・ヌク沢～ナメラ沢、谷川周辺親睦沢登り9パーティほか

◎すずらん通信 NO.307 2006.10 B5 16P 鈴蘭山の会

前号谷川周辺親睦沢登り続き、湯河原幕岩、朝日・東大鳥川チウノ沢、山形・チャリの旅、丹沢、本谷川キュウハ沢ほか

◎すずらん通信 NO.308 2006.11 B5 12P 鈴蘭山の会

谷川・ヒツゴー沢、木曾駒・正沢川・細尾沢、奥秩父・ヌク沢～ナメラ沢ほか

◎すずらん通信 NO.309 2006.12 B5 8P 鈴蘭山の会

丹沢ハイク、名栗・湯基沢フリクラほか

◎すずらん通信 NO.310 2007.1 B5 8P 鈴蘭山の会

野沢温泉スキー、八甲田スキーほか

◎すずらん通信 NO.311 2007.2 B5 4P 鈴蘭山の会

横手山～寺子屋峰スキー、白馬・乗鞍岳スキーほか

◎すずらん通信 NO.312 2007.3 B5 12P 鈴蘭山の会

神楽峰スキー、安房山～乗鞍岳、冬山訓練、猫魔ヶ岳～雄国沼スキーほか

◎すずらん通信 NO.313 2007.4 B5 12P 鈴蘭山の会

乗鞍岳スキー、十石山、那須三本槍岳スキー、奥志賀～塘塚、雨飾山ほか

◎すずらん通信 NO.314 2007.5 B5 10P 鈴蘭山の会

三田原山、火打山スキー、乗鞍岳スキー、越後・道行山スキーほか

◎すずらん通信 NO.315 2007.6 B5 24P 鈴蘭山の会

沢の救助訓練・奥多摩日原川、会津駒ヶ岳、三田原山、火打山、白馬・大雪渓と鎧温泉、餓鬼谷～五竜岳、燧ヶ岳、黒部源流、白馬乗鞍周辺、小雲取谷ほか

◎逍遙 NO.12 2006.7 B5 21P 逍遙渓稜会

丹波川本流、天竜川・小黒川、一之瀬川本流、羽後・シトナイ沢～部名垂沢、上州武尊・木の根沢大沢、奥秩父・釜ノ沢東俣、巻機山・登川姥沢川南ノ入沢、丹沢・玄倉川小川谷、奥多摩・水根沢谷、平ヶ岳・下台倉沢ほか

◎逍遙 NO.13 2006.8 B5 16P 逍遙渓稜会

谷川・檜又沢ススケ沢、北ア・金木戸川木北ノ俣川～赤木沢、奥利根・檜俣川狩小屋沢ヤブ沢、前深沢～狩小屋沢、矢種沢～奥矢種沢ほか

◎逍遙 NO.14 2006.9 B5 32P 逍遙渓稜会

谷川・万太郎谷、湯檜曽川東黒沢～ウツボギ沢左俣、湯檜曽川ゼニイレ沢、丹沢・モロクボ沢、和賀・堀内沢八瀧沢、朝日・朝日川朝日俣沢岩魚止沢、越後・米子沢ほか

◎逍遙 NO.15 2006.10 B5 22P 逍遙渓稜会

足尾・松木川蝉背沢、丹平治沢左俣、朝日・大朝日岳、越後・登川丸ノ沢左俣、奥秩父・笠取山、那須・阿武隈川南沢、湯川御沢川、越後・水無川笹花沢、南ア・尾白川唐音沢、奥多摩・盆堀川栗ノ木王沢桐葉窪ほか

◎逍遙 NO.16 2006.11 B5 24P 逍遙渓稜

大菩薩・大鹿川ズミガ沢、両神・野栗沢赤岩沢右俣、御坂・芦川濁沢、丹沢・鳥屋鐘沢、東沢石棚沢～石小屋沢、本谷川キュウハ沢、鳥屋待沢、早戸川カサギ沢、谷太郎川不動沢水ノ尻沢、大小屋ノ沢唐沢川石尊沢、南ア・小河内川、奥多摩・丹波川ジゴク谷、奥鬼怒・湯沢ほか

◎逍遙 NO.17 2006.12 B5 18P 逍遙渓稜会

奥多摩・海沢井戸沢、倉戸沢、つづら岩、北秋川湯久保沢、丹沢・河内川モロト沢、水無川沖ノ源次郎沢、日向薬師の岩場、四十八瀬川勘七ノ沢、房総・小櫃川キンダン川ほか

◎逍遙 NO.18 2007.1 B5 14P 逍遙渓稜会

八丈島・大川～三原山直登沢、三原川、奥多摩・つづら岩、伊豆・城山、日光・社山、奥多摩・岩場下見山行・馬頭刈尾根、奥鬼怒・三依山、信越・根子岳スキーホカ

◎逍遙 NO.19 2007.2 B5 16P 逍遙渓稜会

丹沢・表尾根、玉原・尼ヶ禿山スキー、奥多摩・つづら岩、奥武藏・日和田山、八ツ・蓼科山、房総・鴨川弁天島岩トレほか

◎逍遙 NO. 20 2007. 3 B5 24P 逍遙渓稜会

箱根・外輪山、丹沢・葛葉川、椿丸、水無川源次郎沢、早戸川本間沢、玄倉川弥七沢左又～右又、西沢下棚沢、玉川日向川大山沢、奥多摩・南秋矢沢軍刀利沢、入川谷大倉沢、養沢川鈴ヶ尾沢～つづら岩、日原川鷹巣谷、越後・平標山スキーほか

◎逍遙 NO. 21 2007. 4 B5 30P 逍遙渓稜会

奥多摩・大沢川琴平沢、塩地谷、日原川鷹巣谷水ノ戸沢、峰谷川坊主小屋沢、カロ一川谷、丹沢・エビラ沢、奥武藏・白岩入ハネバミ入、谷川岳、丹沢レスキュー訓練、御坂・毛無山、奥秩父・熊穴沢～滝川～楨の沢ほか

◎逍遙 NO. 22 2007. 5 B5 20P 逍遙渓稜会

奥多摩・小川谷悪谷左俣、日原川川乗谷逆川、奥秩父。和名倉沢、笛吹川丸渡沢ナメラ沢、滝川金山沢、オーストラリア・ブルーマウンテン、奥武藏・大血川横岩沢、須金山塊・江合川保呂内沢西ノ股沢、大菩薩・平つ沢ほか

---

#### 会報

---

◎ADVENTURE forum NO. 22 2007. 2 A4 8P 植村記念財団

小谷武福氏、竹内洋岳氏の記事ほか

◎遭難事故報告書 2006. 12 B5 32P 童人トマの風

2005年9月24日、唐沢岳幕岩で遭難した長沢氏の事故報告書

◎とまのかぜ 年報 NO. 13 2006. 11 B5 259P 童人トマの風

1月の八ヶ岳集中・7本、3月の焼山北面台地7本、6月の越後清津川集中8本、9月の万太郎集中・9本、無雪期の山・飯豊三本、下田川内5本、南会津1本、毛猛1本、越後三本、谷川1本、北海道4本、東北7本、北ア三本、上信越1本、東京近郊4本、関西1本、離島海外2本、雪の山・朝日飯豊2本、南会津毛猛5本、下田川内1本、越後7本、谷川2本、北海道東北11本、北ア8本、頸城三本、中ア南ア八ツ6本ほか

◎年報わらじ NO. 29 2006. 12 A5 361P わらじの仲間

2005年冬合宿・飯豊4本、冬の集中・海谷駒ヶ岳三本、春の集中・会越叶津川4本、夏の合宿・飯豊三本、秋の集中・朝日祝瓶山2本、訓練山行・2本、記録では・無雪期・38本、新雪期・三本、厳冬期・9本、残雪期・7本、山スキー・14本、海外・三本、山行一覧ほか

◎朝日連峰水源の沢 2006. 9 B5 367P 宗像兵一、逍遙渓稜会

なんと素晴らしいことか、宗像兵一氏が一人でまとめた朝日連峰の沢の記録。よくこ

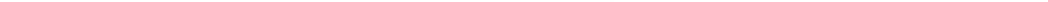
れだけ登ったものである。これから朝日連峰を目指す沢屋のバイブルとなるだろう。  
最上川水系22本、赤川水系27本、三面川水系13本、荒川水系10本、その他事  
故報告、朝日の沢山行一覧ほか

以上閲覧したい方は本図まで

## 編集後記

先日私が通っているジムでほぼグランドフォールがありました。床すれすれのところでとまり、クライマーは両足の踵を骨折しました。10mの高さから落ちたのですからその程度の怪我ですんでよかったというべきかもしれません。ビレイデバイスのセルフブレーキが機能しなかったことによる事故でした。技術は日々進歩し、どんどん便利な物が現れますぐ、過信は禁物です。便利=安全ではないと改めて思った次第です。

(S子)



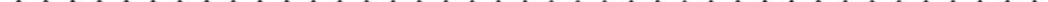
季報〔R & V〕第62、63号 発行 2007年秋

発行人：本図一統

発行所：ACCJ-茨城

編集者：本図一統、渡辺聰子

印刷所：やまと印刷





岩壁、沢、冬山のクライミング集団